編集後記

▼いま、県内の小・中学校の現場に、あたかも天の啓示のような勢威をもって「新学力観」なるものが舞い降りてきています。多くの学校がいち早く、たとえば「新しい学力観に基づいて授業改善を図り、一人一人に『できる喜び、わかる喜び』を体得させる…」（北魚・某小学校）などのように、学校の教育課題に「新学力観」ということばを掲げています。

小学校で新しい学習指導要領が完全実施されて二年目に入っています。すでに「神様でも教え切れない程の超過密さ」に低学年から学力格差がますます拡大し、どう基礎学力をつけたらよいか「ベテラン教師さえ悲鳴をあげている」といわれていますが、「関心・意欲・態度」を最重要視する「新学力観」は、この事態にどう対応しようというのでしょうか。本号では、新潟県の実情に即してその正体を明らかにし今後の教育実践の課題を探りたいと考え、特集を組みました。

（片岡　弘）

▼八木三男氏の「妖怪のような『新学力観』（上）」は、小、中学校の直面している中心的な問題の本質を解明しています。―「文部省流『新学力観』とは、学校の授業で『基礎的・基本的な内容を児童生徒一人一人に付けさせることで』はない。端的にいえば、『基礎的・基本的な内容』それ自体に弾力性や多様性があり、子ども一人一人違っており、共通的に身につけさせるものではない」、「『新学力観』は、『みんなが百点』などという誠実な教師たちの血のにじむような努力による教育実践を嘲笑うかのようである」と。

▼八幡明子氏、板橋育夫氏、住安孝夫氏らの小、中学校からの報告と八木論文を併せて検討していただければと願っています。

（吉田　武雄）

▼孫の「六年生一学期の通知表」が仏壇に上がっていました。成績よりも通知表そのものに関心があったので、早速開いてみました。

▼「学習のようす」は一学期分だけ貼付してありました。態度・意欲に関する評価の項目が教科の筆頭に掲げてあるのは三教科だけで、残りの五教科は全部理解・技能に関するもので、文末表現は「できる」「わかる」でした。しかも学習の内容が極めて具体的にわかり易く書いてありました。「生活のようす」の主な観点十一項目もわかりにくい抽象名詞ではなく、具体的な行動が掲げられています。

▼後でその学校の先生に電話で聞いてみました。一昨年度までは指導要録準拠型でしたが、先生方で話し合って、昨年度から、その学期に学習したことがらや行動が、子どもにも親にもよくわかるものにしようと、このように改めたとのことでした。

▼昨年度といえば、指導要録準拠、新学力観に基づく横並びの通知表の出た年でした。教育現場は金縛りと思っていたのに、一筋の光明を見出したような救われた思いでした。

（若月又次郎）

にいがたの教育情報　No. 35

1993年8月20日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発　行　人　長崎　明

新潟市東中通1－86　山崎ビル2F

〒951　電話（025）228－2924

振替口座・新潟4－12332

印刷所　㈲中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。